

市民と協働のまちづくり

地域と行政の連携により、多様な視点やアイデアをまちづくりに活かすとともに、地域活動への参加を通じて、共に支え合う協働社会の実現を推進しています。

市民とともに考える、子どもの権利と子育てのこれから



令和7年4月に行った「宮古島市子育て応援宣言」を踏まえ、本市における全ての子どもに「子どもの権利」が保障され、日本一子育てしやすい島を目指すため、市民とともに学び合いながら、条例や計画の策定・検証を行う仕組みづくりを進めています。

地域の声が、暮らしを動かす行政施策になる



地域の方々と直接意見交換を行う「地域懇談会」。道路の補修や防犯灯の設置など、日常生活に密着した課題に加え、少子高齢化の進行や定住促進といった将来を見据えた施策についても活発な意見交換を行っています。

未来戦略会議

市民ニーズが複雑化・多様化する中、行政が時代の変化に的確に対応していくため、本市の将来を担う若者を中心とした未来戦略会議を開催しています。

若者が市政に参画することにより、既存の枠組みにとらわれない若者ならではの視点・発想から新たなビジョンを描き、持続可能な発展に向けた戦略を立案・推進しています。

宮古島らしい景観を、みんなで描く対話の場

宮古島の自然と特有の生活文化の風景は、かけがえのない景観資源であり、次世代へと受け継ぎ豊かに育んでいきたい大切な宝です。この宝を生かし、魅力あふれる宮古島であり続けるため、市民の皆さんと共に景観まちづくりを進めています。

中小企業と創り上げる地域経済の未来

宮古島市では、令和7年度に施行した宮古島市中小企業振興基本条例に基づき、商工団体や民間団体、金融機関などが参加する「中小企業振興会議」を設置しました。地域の課題やニーズを共有し、DX推進や人材確保など地域経済の持続的発展に向けた施策を検討しています。

市民の声を活かし、まちの未来をデザイン

将来の宮古島がさらに発展していくために、市民の皆さんがまちづくりを「自分ごと」として捉え、一緒に考え、実践していくきっかけとなるよう、まちづくり講演会やワークショップなどを開催しています。

花とともに、明るい毎日

市民の身近に花と緑が広がるきっかけづくりとして、**学校、幼稚園、自治会、島内企業等の団体に花の苗を提供**しています。参加団体には、苗づくりから植え付け、日常の管理までを担っていただき、景観の向上と潤いのあるまちづくりを推進しています。



島をきれいに。みんなで作る、行動の日

5月30日は語呂合わせで「ごみゼロの日」です。「美ぎ島（かぎすま）宮古」を目指す取り組みとして、民間団体と協働で「**島内ごみゼロ大作戦**」を実施しています。毎年、多くの市民や児童・生徒、団体・企業が参加し、官民一体となってごみ拾い活動に取り組んでいます。

「**ごみゼロマズムヌ**」は、ごみが大好きで、ごみをたくさん食べさせることで封印できるキャラクターとして誕生しました。子ども達も楽しくごみ拾いをし、マズムヌを封印しています。



ごみゼロマズムヌ

ビーチクリーンボランティア

宮古島市では、市民による**ビーチクリーンボランティア**が活発に行われています。市が集められたごみの回収・処理を行い、市民・企業・団体・行政が連携しながら、美しい海岸の保全に取り組んでいます。



安全・安心

地域や関係団体と連携し、防災・防犯対策の充実を図ることで、市民が安心して暮らせる安全なまちづくりを進めています。



防災力・消防力の強化

救助が困難な事故・災害現場から要救助者を安全に救出するため、都市型救助資機材を用いた救助訓練を重ね、救助能力の向上を図っています。

また、最新の救助工作車と救助資機材は、その性能が格段に向上しており、より安全・確実・迅速に災害対応を可能とし、**防災力・消防力の強化**に大きく貢献しています。



救急処置の普及で だれもが、命を守る担い手に

事故や疾病により傷病者が発生した際、現場に居合わせた人（バイスタンダー）が適切な救命活動を行えるよう、正しい知識と技術の習得を目的に「救命講習会」を実施しています。講習会は月2回のほか、企業、学校、介護施設など幅広い層を対象に実施し、心肺蘇生法やAED使用法等を通じ救命率の向上を目指しています。



防災フェア、消防出初式

毎年11月9日からの「秋季全国火災予防運動期間中」に「防災フェア～親子消防体験～」を開催しています。はしご車試乗や放水体験等を通じ、親子に消防業務への理解を深める機会を提供しています。

また、1月上旬には伝統行事「消防出初式」を開催しています。式典、訓練、一斉放水などを実施し、消防職・団員の士気高揚と市民の防火思想の向上を図っています。



地域で未来を守る

「自分たちの地域は自分たちで守る」という考えのもと、自助・共助の要となる「自主防災組織」の設立や活動を支援しています。この取り組みによって、地域の防災力を向上させ、市全体で災害に強いまちづくりを目指しています。



地域を護る知恵と力 防災士育成を支援

災害に強い地域づくりを進めるため、災害の知識や対応のスキルを持った「防災士」の育成を支援しています。防災士の資格取得をサポートすることで、災害時に適切な判断ができる人材を増やし、地域全体の防災力を高めています。

夜道に、見守りの光を

夜間の安全確保と犯罪防止のため、市街地を中心に約300基の防犯灯を設置しています。また、郊外地域においては、自治会による防犯灯の新規設置を支援しています。省エネで明るいLED灯などを使用し、生活道路を明るく照らすことで、安心して通行できる環境づくりに取り組んでいます。

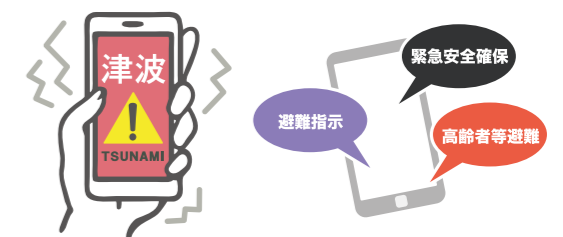


地域で育む交通安全

春・夏・秋・年末年始の年4回、交通安全運動出発式や街頭立哨活動を実施しています。飲酒運転の根絶や歩行者の安全確保を重点に、市民の交通安全意識向上を呼びかけ、交通事故防止に努めています。市民一人ひとりが交通ルールを守り、思いやりのある行動を心がけることが、安全な交通社会の実現につながります。

信頼される情報が防災力を高める

災害時に市民の皆さんへいち早く正確な情報を届けるため、スマートフォン等、様々な情報伝達ツールを活用し災害情報をお知らせしています。



文化

知ることから始まる、伝統文化の継承

宮古島市には、国・県・市指定文化財が総数 157 件あり、その数は県内最多を誇ります。また、宮古島のパーントゥ（島尻のパーントゥ・野原のサティパロウ）は、2018 年にユネスコの無形文化遺産「来訪神：仮面・仮装の神々」に登録されました。

島の大部分が琉球石灰岩で形成される特徴的な地形と、その島の環境下に生きる動物、植物、そして人々が築いてきた歴史、民俗、文化には独自の地域性がみられます。

サンゴ礁と石灰岩がおりなす地形

サンゴ礁が隆起してできた琉球石灰岩の島には、水や風などの浸食により、多くの洞窟や、独特の海岸地形が形成されています。海域では、八重干瀬に代表されるようにサンゴ礁群が発達しており、これらの陸域、海域で形成される自然景観は宮古島を代表する文化財群です。



八重干瀬



保良の石灰華段丘

宮古島の湧水群

大きな川のない宮古島市において、湧水地は、人々の生活を支える大切な水場でした。市内に点在する湧水地は、宮古島市の自然地形と密接な関係性をもって形成され、宮古島市の歴史と文化を語る上で非常に重要な文化財群です。



山川ウブカー

友利のあま井

仲宗根豊見親の治世

歴史資料には、14 世紀から 15 世紀にかけて、宮古島の各地に有力者があらわれ、争乱の時代があったことが記されています。やがて 15 世紀末になると、仲宗根豊見親が宮古島全域をおさめるようになります。仲宗根豊見親は、蔵元を創設し、島内の統治制度を整えるとともに、漲水泊（現在の平良港）と那覇港の往来が活発化していきます。



金頭銀簪



西銘御嶽

国選定文化財 宮古のクイチャー

宮古のクイチャーは、宮古諸島各地に伝承されている集団の踊りです。豊年祭や雨乞い、また娯楽として、集落ごとに生き生きと踊られてきました。

クイチャーは、通常野外で男女が輪になって歌い踊るものです。皆で声を合わせて歌いながら円陣をつくり両手を前後左右に振り、大地を踏みしめて跳びはねる動作を繰り返し、合間に手拍子を打ちます。



うるかのクイチャー

国重要無形民俗文化財 宮古島のパーントゥ（島尻、野原）

島尻のパーントゥは、サトゥブナハの 3 回目（旧暦 9 月初）に、面をつけ、全身にシイノキカズラをまとい、泥をつけた 3 体のパーントゥが集落内に出現し、厄払いを行います。また、野原のサティパロウでは、パーントゥの面をつけた男の子と、頭や腰にクロツグとセンニンソウをまいた女性達が、集落内の道を歩いて厄払いを行います。



島尻のパーントゥ



野原のサティパロウ

人頭税と宮古上布

1637 年より宮古・八重山諸島で用いられた人頭税制は、台風や早魃などに関わりなく各村の人口をもとに割り当てられた定額の税制度であり、島民に大きな負担を強いるものでした。その中で、女性は苧麻を原材料とした反布を税として納めました。人頭税廃止後は、島の一大産業へと発展していき、古くからの伝統的な宮古上布の製作技術は、国の重要無形文化財に指定され、その原材料となる苧麻糸の製作技術も国の選定保存技術に認定されています。



ブーンミ（糸を撚りつなぐ）